

カタクリ

もののふの ^{やおとめ}八十娘子らが 汲みまがふ

寺井の上の ^{かたかご}堅香子の花 大伴家持

「乙女たちが次々に寺の井戸に水を汲みに来て談笑しているが、ふと見るとその辺りには可憐なカタクリが沢山咲いていることよ」と家持は目を細めながら春の訪れを楽しんでいる。カタカゴはカタクリの古名であり、傾いた籠状の花を意味していた。カタクリの学名は *Erythronium japonicum* で、日本のどこにでも見られた花であるが、今では絶滅危惧種に名を連ねている。胃腸炎や病人食、皮膚炎などに利用されて来た片栗粉はジャガイモの澱粉に取って代われ、本物はもう殆ど手に入らない。ところでこの歌の面白さは可憐な乙女やカタクリと「もののふ」との対比である。「もののふ」と言えば武士のことであるが、『万葉集』では「物部」が当て字として使われている。「物部の」は「八十」(たくさん)に懸かる枕詞で、^{ものべ}物部は多くの氏に分かれていることに由来する。物部氏は大伴氏とともに古来朝廷に仕えた武門である。物部守屋の代になって、新しい世界観である仏法を取り入れた蘇我氏に敗れ没落するのだが、その末裔は全国の神社の社家や国造などの要職に就いている。例えば石見国の一の宮「物部神社」の社家は長田氏で、その地方の物部氏の長であった。長田徳本は三河の神主をしていた^{おさだ}長田氏の出身であるから、物部と繋がりがあるのかも知れない。荻生徂徠も物部氏の子孫と言われている。

さて古伝『^{ほつまつたると}秀真伝』では、物部の名は天照大神の時代にまで溯る。家五軒を治める長を^{ひとてゆび}一手指、八十手指を治める長を^{あれおき}村長、八十村を治める長を^{あがたぬし}県主と言った。その県主は国から出向した^{くにつこ}国造でもあり、その国造(国神)のことを物部と称したのである。物部の長が大物主であり、現代の総理大臣に当たる。ある時天照大神が大物主を始めとした大勢の物部を集めて訓示を垂れた。「物部ら ^{おおもものぬし}しかと聞けこれ わがままに 民を斬るなよ 民は皆 なおわが孫ぞ その民お ^{おみ}守り治むる 国神はこれなおわが子」と。君から見れば臣は子、民は孫になるので、慈しみを忘れてはならないというのである。その伝統は今に生きている。ユダヤ人のモルデカイ・モーゼが著した『日本人に謝りたい』には、こんなことが書かれている。「天皇が開口一番、自分のことはどうなってもいいから国民を救ってほしいと切り出した時、マッカーサーは驚天せんばかりであった。この席にルソーが同席していなかったのが真に残念であるが、西洋の君主というものはそれこそマルクスのいう支配者、搾取者である……ルソーは『我もし随意に祖国を選べといわれれば、君主と国民との間に利害関係のない国を選ぶ。しかし現実にそのような国があろうはずもないから、止むを得ずその代替物として民主主義国を選ぶ』といっている。……ユダヤ人はルソーの言を俟つまでもなく、長年このような君主制を夢に描いてきたのである」と。世界の君主を打倒して国際化を図ったルソーもマルクスも、グローバリズムを推し進めるウォール街の資本家も皆、自国を持ってなかったユダヤ人である。

大伴家持が君臣民の区別なく和歌を収載した『万葉集』は世界に冠たるものである。家持は臣としての矜持を持っていたために、冒頭に「もののふの」を挿入したのであろう。また、乙女やカタクリさえも子や孫のように映じたに違いない。少子化が進む日本がカタクリのような絶滅危惧種に成らないことを願うのみである。

(山人)

